

仏様のおはなし新シリーズ第129集「いまさら」

死の縁無量だといえます。どんな形になるかわかりませんが、誰しみが必ず娑婆の縁終えるときがやってまいります。できることなら、家族に看取られながら静かに息を引き取りたいと思いますが、そう上手くはいかないのが私たちの命の現実です。しかし、阿弥陀様は私の臨終の善し悪しを一切問いません。「苦しみもがき死んでいこうが、安らかに息絶えていこうが、関係ない。そのままのあなたを、今助けるよ。大丈夫だよ。」としか仰りません。あとで助けるとは仰りません。「今助ける」が阿弥陀様という仏さまでです。

龍谷大学第五代目の学長をされた、足利瑞義(1872-1944)和上が亡くなる前日、お姉さまである甲斐和里子先生が看病にこられていました。甲斐先生が病院にこられたとき、すでに足利和上は苦しそうに呻っておるばかりで、一向にお念仏を申す様子がなかったようです。そこで甲斐先生は不審に思われて、「あんた呻ってばかりおるけど、お念仏さまは出てくださらんかのお」と聞かれました。病気になる前は、日頃から常にお念仏をされていたんでありましょう。その言葉を聞いて足利和上はたった一言、懐かしそうに甲斐先生を見ながら、

「いまさら」

と仰って微笑んでおられたそうです。この「いまさら」は、もういまさら御念仏をしたって間に合わない、という諦めの「いまさら」ではなく、たった一声のお念仏さえも申せない自分を目当てとして、「大丈夫だよ。苦しんでいるそのままのあなたを必ず我が国浄土へ生まれさせるよ。安心しなさい。私がいるよ。」と、間に合う先手のお救いを喜ばれた、本当の安堵から出た「いまさら」という一言です。

阿弥陀様は「身と心を整えてしっかりと命を終えなさい」とは仰りません。「あなたはどうであつても、しっかりした私がいるから、安心しなさい。大丈夫だよ。」と私を喚んでおられます。そのこと一つを聞かせていただいた上は、ありがとうございませう、と精一杯お念仏をさせていたくださるが、浄土真宗というご法義であります。

浄土真宗本願寺派福岡組



福岡組

検索